

# SHOW HEY シネマルーム

ロストクライム - 閃光 -

2010年・日本映画  
配給/角川映画  
118分

2010(平成22)年5月26日鑑賞 角川映画試写室

## Data

監督：伊藤俊也  
脚本：長坂秀佳、伊藤俊也  
原作：永瀬隼介『閃光』（角川文庫刊）  
出演：渡辺大 / 奥田瑛二 / 川村ゆきえ / 武田真治 / かたせ梨乃 / 宅麻伸 / 原田芳雄 / 夏八木勲 / 矢島健一 / 菅田俊 / 春田純一 / 伊藤明賢 / 奥村知史 / 中村映里子 / 烏丸せつこ / 熊谷真実 / 中田喜子 / 針原滋

## 👁️👁️ みどころ

なぜ今、「3億円事件」を映画化？それは、昭和という激動の時代を総括できる題材だから。事件が起きた1968（昭和43）年という時代の象徴は全共闘運動。伊藤俊也監督は、そこに3億円事件の「深層」を見い出したが・・・。

他方、「もし犯人が警察上層部の師弟だったら・・・」という「大胆な仮説」にビックリ！えっ、警察権力ってここまでやるの？という驚愕と共に本作を味わいたい。そして、なぜ公訴時効が完成し、犯人が見つからないのかを今一度考えたい。

## なぜ犯人を逮捕できなかったの？

私が大学に入学したのは1967年4月。そして、3億円事件が起きたのは1968年12月。東京の府中刑務所脇を走っていた現金輸送車を白バイの警察官が呼びとめ、「この車には爆弾が仕掛けられている」と伝えて車の下に潜りこみ、車の下から煙を上げ、行員たちが避難した際に、現金を積んだ輸送車ごと乗り去った事件だ。当時の3億円は、今の20億円くらいらしい。

犯行現場には犯人が乗り捨てた白バイなど多くの遺留品があったから、犯人の逮捕は時間の問題と思われていた。それにもかかわらず結局犯人は逮捕されず、7年間の公訴時効を迎えて迷宮入りとなった。なぜ世界一優秀な日本の警察が、この3億円事件の犯人を逮捕できなかったの？それが何よりの疑問点だ。

## なぜ公訴時効は7年？

1968年12月に起きた3億円事件は、7年後の1975年12月に公訴時効が成立した。ちなみに近時の厳罰化の流れの中、公訴時効の考え方も少しずつ変わり、殺人罪については公訴時効をなくそうという意見まで登場している。そんな中、平成16年12月公訴時効の期間の一部について法改正がなされ、平成17年1月1日から施行された。つまり 死刑にあたる罪は25年、無期の懲役・禁錮にあたる罪は15年、そして をとばして、長期10年未満の懲役・禁錮にあたる罪は5年、長期5年未満の懲役・禁錮にあたる罪は3年、拘留・科料にあたる罪は1年は変更なしだが、その中間にあった長期10年以上の懲役・禁錮にあたる罪は7年だったものが、新たに二段階に細分化された。すなわち - a長期15年以上の懲役・禁錮にあたる罪は10年、 - b長期15年未満の懲役・禁錮にあたる罪は7年、に改正されたわけだ。

しかして、3億円事件が窃盗罪なら旧法に従うから、「長期10年以上の懲役・禁錮にあたる罪」としてその公訴時効は7年となる。

## これは窃盗？それとも強盗？

1968年の3億円事件は窃盗？それとも強盗？「10年以下の懲役又は、50万円以下の罰金」を刑罰とする刑法235条の窃盗罪の構成要件は「他人の財物を窃取した者」それに対して、「5年以上の有期徒刑」を刑罰とする刑法236条の強盗罪の構成要件は「暴行又は脅迫を用いて他人の財物を強取した者」とされている。前述のように3億円事件は白バイに乗ったインチキ警察官が「この車には爆弾が仕掛けられている」と嘘をついて現金輸送車の運転手を避難させ、現金輸送車で乗り去った事件だから、暴行も脅迫もないことは明らか。すると、これは強盗ではなく単なる窃盗事件。

したがって、プレスシートには「強奪事件」と書いてあるけれども、強奪という表現は刑罰的には適切ではない。窃盗は普通密かにやるものだが、3億円事件は言ってみれば、白昼堂々公然と相手を騙した形で窃盗をしたに過ぎないわけだ。

## 世紀の完全犯罪が、なぜ今映画化？

3億円事件を研究した文献や小説の数は多い。また、『俺が真犯人だ 府中 三億円事件』（猫屋犬平・1993年・日本図書刊行会）という物騒なもの(?)から、『3億円事件ホシはこんなやつだ』（平塚八兵衛・1975年・みんと社）や『別冊宝島 20世紀最大の謎三億円事件 「真犯人」と追跡者たちの40年』（2008年・宝島社）などの探究本(?)までバリエーションも多い。本作の原作になったのは、3億円事件の「深層」に「大胆な仮説」で迫った永瀬隼介の『閃光』（2003年5月・角川書店）だが、伊藤監督はなぜ今その映画化を？プレスシートによると、それは「ちょうど伊藤自身、映画界に入り50周

年にあたる節目の年を2010年に控え、人生の大半を過ごしてきた“昭和”という激動の時代を総括できる題材を求めていた。三億円事件ならそれが叶う、まさに絶好の機会が訪れたのだ。」と考えたためらしい。

さあ、「昭和という激動の時代を総括できる素材」として白羽の矢を立てた3億円事件とは？あっと驚くのは、3億円事件がなぜ迷宮入りとなったのかについての本作のアプローチ。3億円事件の「深層」と「大胆な仮説」にビックリだが、ホントにこんなことがあったの？日本の警察って、ホントにこんなことを？日本の国って、ホントにこんな国？そんな驚愕の中で、本作をじっくり鑑賞したい。

## 昭和とは？1968年とは？

明治は45年間、大正は15年間、両者とも激動の時代だったが、64年間も続いた昭和は、戦争から平和へ、そしてどん底から経済成長へと大変化を遂げた激動の時代。ちなみに、22年間続いている平成は、徐々にしかし確実に日本が地盤沈下し、沈没の方向に向かっている悲しい時代？戦前はさておき、戦後の昭和を代表する人物といえば、歌手なら美空ひばり、野球選手な長嶋茂雄など数多いが、あなたにとっての昭和とは？

私にとっての昭和とは、1960年後半の学生運動の時代だが、1937年生まれ of 伊藤監督にとっての昭和も1968（昭和43）年という激動の時代であり、中でも同年12月に起きた3億円事件だったらいい。伊藤監督が本作のスクリーン上に、1968年を代表する映像として紹介するのは、1月の東大紛争、4月のマーティン・ルーサー・キング・ジュニア暗殺事件、5月のフランスでの五月革命、10月の新宿騒乱事件などだが、あなたにとっての昭和とは？またあなたにとっての1968年とは？

## 主人公は新旧2人の刑事

本作の主人公は、隅田川で発見されたラーメン屋店主・葛木勝（針原滋）殺人事件の捜査でコンビを組む、滝口政利（奥田瑛二）と片桐慎次郎（渡辺大）の新旧刑事。定年間際の滝口が押しかけ女房的に捜査本部に割り込んだのは、既に犯人（ホシ）に目星をつけていたためだが、事情を全く知らないままコンビを組まされた新米の片桐は振り回されるばかりで、えらい迷惑。しかしある日、「ガイシャは3億円事件の最重要容疑者だった」と聞かされた片桐は、自分がまだ生まれていない時に発生した大事件との絡みがあるを知って大張り切り。上層部の指示を無視し、独自の経験とカンそして長年の執念で集めた情報によって動く滝口だが、次第に片桐はその有力なコンビになっていった。

今頃になって3億円事件の最重要容疑者が殺されたのは、カネの配分をめぐる仲間割れ？すると3億円事件のホシは複数？そんな片桐の質問に滝口はうなずいたが、そこまでわかっていたのなら、なぜ3億円事件の捜査員だった滝口は容疑者をパクらなかつたの？松本清張の原作を野村芳太郎監督が映画化した、私が邦画のナンバーワンに挙げる名作『砂

の器』(74年)も丹波哲郎と森田健作の新日刑事がストーリーの軸を構成するとともに大きな存在感を示したが、本作もベテラン俳優・奥田瑛二と若手俳優・渡辺大が同じようにいい味を出している。



©2010 「ロスクライム-閃光-」製作委員会  
発売日:2010/12/10(金) 価格:¥4,935(税込)  
発売・販売:角川映画

## 大胆な仮説とは？

あなたは「管理官」って知ってる？日本の警察は警察庁長官をトップとするピラミッド型組織だが、管理官は聞き慣れない言葉。しかし、本作の藤原孝彦管理官（矢島健一）を見ると、その権限は絶大らしい。ラーメン店主殺害事件を担当するのは警視庁刑事部捜査第一課だが、いつのまにか犯人捜しは脇に追いやられ、滝口・片桐コンビとの対立が顕著になっていく。あれあれ？それは一体なぜ？

本作の「大胆な仮説」とは、もし「3億円事件の犯人が、警察上層部の息子、娘であったなら？」というもの。もしそうなら、犯人が逮捕されると警察の権威は地に落ちてしまい国民の非難を受けること必至。だから、もしそうだとしたら、警察上層部は一致して事件を迷宮入りさせる方向に？そう考えると、あれだけの遺留品があったため犯人の逮捕は時間の問題と思われていた3億円事件が公訴時効になってしまったのもうなずけるというものだ。しかし、悪名高きかつてのソ連のKGB（ソ連国家保安委員会）とは異なり、クリーンで鳴る（？）日本の警察組織でそんなことがありうるの？そんなことはありえないと多くの人が考えるからこそ、本作の仮説は「大胆な仮説」なのだ。

## 3億円事件の「深層」とは？

窃盗事件で足がつくのは、どうしても犯人が盗んだカネを使ってしまうため。そんな「常識」から考えると、あの3億円がどこに使われたのかに関心が集まるが、その線からの捜査はどうなっているの？ちなみに、怪盗ルパンや石川五右衛門は自分が使うために窃盗行為をくり返したのではなく、自分の満足感のためあるいは庶民に夢を与えるためだったから、もし3億円事件の犯人の狙いがそうだったとしたら？1968年当時そんな破天荒なことを企画し実行するのは一体誰？その白羽の矢が立ったのが、当時日本を席卷していた学生運動とりわけ全共闘の活動家という線だ。

血なまぐさい「総括」事件を引き起こした連合赤軍の永田洋子やパレスチナに飛んだ日本赤軍の重信房子のように、学生運動の活動家の中には必ず（？）紅一点がいるもの。1968年に遡ったスクリーン上に登場するのは、ヘルメットをかぶりタオルで顔面を覆った全共闘系（？）の活動家たち。その中で一際目立つのが女子学生・真山恭子（中村映里子）だ。タオルをはずすと丸顔のお嬢サマ風の顔立ちだが、言うことはかなりきつい。その仲間たちが緒方純（奥村知史）たちだが、彼らは40年後の今どこで、何を？真山の今の姿は高級クラブのオーナー（かたせ梨乃）だが、左足を引きずって歩いているのはなぜ？

映画は後半少しずつ3億円事件の「深層」に迫っていくが、そこで登場してくるのが、今は三多摩総合病院の院長になっている吉岡健一（宅麻伸） 暴力団の組長になっている金子彰（ダイヤモンド勝田） 食品問屋をクビになり求職中の結城念（飯田裕久）たち。ひ

よっとして死体で発見されたラーメン屋店主の葛木もこの仲間の1人だったの？そんな「深層」はあなた自身の目でしっかりと。

## キーパーソンは緒方と宮本

『砂の器』では巡礼の旅を続ける父と子の姿が印象的だったが、捜査本部解散後も黙々と捜査を続ける新旧刑事コンビによる犯人捜しの契機となったのが、「紙吹雪の女」と題した旅の紀行文として紹介された新聞記事。島田陽子扮する高木理恵子は、なぜ列車から白い紙吹雪を？もしこれが布きれだったとしたら・・・？

「大胆な仮説」で3億円事件に切り込んだ本作のキーパーソンは、緒方耕三（夏八木勲）と宮本翔大（武田真治）だ。役柄によってはすごくカッコいい演技が似合う夏八木勲だが、本作ではホームレス姿ばかりだから、かなり損な役（？）。どうも彼は元警察官だったらしいが、なぜ今こんな姿に？他方、月刊新時代特派記者だという宮本は、風俗嬢の津村多恵子（川村ゆきえ）と同棲している片桐刑事に対して身の危険を知らせたが、それは一体なぜ？まだ若いのに、彼は3億円事件についてかなりの情報通。彼が交換条件として滝口刑事に提供したある情報には、滝口もビックリ。なぜ滝口も知らなかったそんな重要情報を宮本が？そんな2人のキーパーソンの謎が明かされるのは、ラスト近くになってから。7年の公訴時効によって3億円事件の犯人の刑事訴追の可能性はなくなったが、40年後の今も続く生々しい人間ドラマをじっくりと。

## 警察の牙はここまで・・・

映画『小林多喜二』（74年）や『母べえ』（07年）を観れば、悪名高き戦前の特高警察（特別高等警察）の暴虐ぶりがよくわかる。しかし、戦後の民主主義国ニッポンでは、警察だって国民に開かれた、健全で明るい民主警察？ラーメン屋店主だった葛木が殺されたのは単なるモノ盗りや怨恨の線ではなく、3億円事件に繋がる線だと直感した滝口刑事とそれに従う片桐刑事は、捜査本部の思惑とは全然違う勝手な捜査を進めたが、組織一体を誇る「わが社」で、いつまでそんなことが許されるの？勝手な行動は許さない！として滝口刑事と片桐刑事を見限った場合、藤原管理官は、そして警察上層部は2人に対していかなる処置を？まさか2人を闇から闇に抹殺？民主警察がまさかそんなことを・・・？

政治の源泉は権力だから、政治家の権力闘争はものすごいものと相場が決まっている。しかし、かつての自民党内における角福戦争や壊し屋小沢一郎の全盛時代の壊し方に比べると、去る6月2日に展開された鳩山由紀夫総理の退陣劇はその甘さにビックリ。そして、それと対照的な、本作にみる権力の牙のむき方にビックリ！警察権力はここまで牙をむくのか！と驚愕しながら、今一度3億円事件の犯人がなぜ見つからなかったのかを考え直してみたい。

2010（平成22）年6月4日記